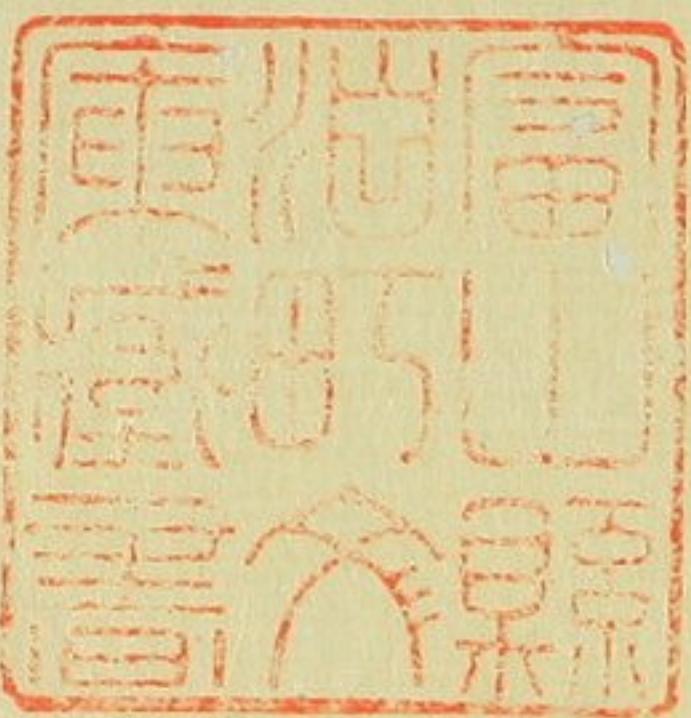


5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 60 61 62 63 64 65 66 67 68 69 70 71 72 73 74 75 76 77 78 79 80 81 82 83 84 85 86 87 88 89 90 91 92 93 94 95 96 97 98 99

首書
家氏物語 卷之二





四
卷二

卷六

雲隱

一
河海秋云

卷名をまくれと名づけ奉
匂音アラミ奉よひりくれ故ありとゆは也

一聲をハナヒトウシマフ一吟をモテテうのふとあつ子
あり此名題まで六集迄ひりくれ故ふもくも
ヤリ此羽代に集ゆりあまくあまき一カ集集ゆ
人の歌をすゝとハシムキモク原と云ふ

万葉抄二
弓削白毛子薨時置棺束人寄

一
おもてあはれがまセハあゆきのいか乃不下小瀧石か
ホニ
大摩白毛子被死と附作焉

りつてのまわゆふやもどきのとみてやま處え
神龜六年在太官長を王賜死之時作考
おほきのみこととぞ大あたのゆくわくねとモ法
天平草大作郎女歎嘆新羅尼理頼死去作考
もあえぬ余すあきひものあがのれりもとモ法
叶不急とく作者のテより此経と

一ふくろりをきてて卷せんわ事

天台あまノ室也 三義あ 通義 日安 別考

門 有門 三義あ 室門 通あ 並有作室門 日安 亦有

有門の傍をハ壁雲室門得たが成るよ所ぞ非

有冰室門ハ迦旃檀子統亦有赤室門ハ毘勘論
よめくやくことさけ共ハ經持玉をすよ爲て漢士よ
持木口ヒキと大師有門室門の義すりてホ
涅槃セアシト因がニ義と判一詰也云義と云
今之ま處乃キとも作者の胸中アーラムナヒ
セアフコリナサヤナリムギン捨すら处を棄て崩
をあらうかいすて壁とのあよこあらねる處の
氣もるや九と古の本學の半分セクリヒ福と人
もあらうてとま内在下共例公はーを釣神
仙傳かくからまきアハトアリス御色のなれえを紫
平湖石も吉野川のあら石窟てんの川ととく

入室してもううへはかの御起ゆるごと

一 宮院頬滅の事

黄帝の玉ふのやつてよ比擬すがく中古のえを
やどあくわだのあかすくねんか一今まよとまも
こうお年卷よ董夫子乃祠よが院うせびては
二三年ばかりのま、小さじひきむねーさうのあん
みもた系代よのうのく人のうちあるおもろんと
りくさんゆきうしまりせとのいきて古城院よ
酒井の所とあらわしとハモ酒井と一帖あるよ
ちこち卷中のく近くうつて二間よ朱雀院書
きをまめ改仕と改店賛と店下カケルく

うかくきくうかくうかまにうと頬滅うかま
や又ききくえま董中ねすりうれをもみまきト
み幼稚とんとくう三歳く坐と匂無教の卷
まふ元服わく中ねハ竹匠とんくうとおもて
おりしわうすへ

一 花鳥餘情云

此卷はあくあつて其祠かへり
其翁あく六角院の昇殿の事、ばのとさかがく
てまほとあつせゆく幻のものとつよ御年の
月をあわせ、其翁よ六角院へ移滅へぬどりの
あくようせゆく事、萬物妙よがくゆきとあま卷
よがま虎せとこどもがて二三年から落葉院よ源

居一おとづりてそれへ此御よりお滅のまへ乃
ありやうきをうわく卷が、は葉天ねひの歳の時也
自きの卷のぬよひううれびが、はともう初もう
匂のあそぶ葉は古歳か、故よ葉乃古歳トリ十三
までの乃ハナ年、乃キハ此御のやりておひとしゆと
あくハモテ御の年小活版化す三年後年した
てモ歴前かしておまとせをよ御わうひあくと
桜卷名うわうて、頬とやくすい天台のもの内
と例よ川れどに御をじんちくゆと信書と絶
いくモ詔の小紙の年、萬坂向華華泰由度宗立
由儀の文寫ふるのをもうて詩の詞ハフ

乞ハ逸詩となりて、りとハ詞玉へうむをうむ
ニヨリよりうて、東廣徵となりし人詞とはうて
入て補もの詩とあつて文選乃方十れ卷よの聲
う朱晦庵ハ筆の如とひて樂曲乃ふきれ之の
詞ハヤドリあくへうむとく一ゆくらみ曲篇
れぬみこみて初か此筆の文章の意を乃名めく
ありて、アとはあんとおあくうむ

一
細流抄云　桜井はたよ玄隱卷あるくま車
古人難矣とすり御共別車か、酒席たまよ
あくこううううと玄隱とくま車人の遊む車
よのと玄采用するもう禁御ありくま車

但作者の云那考ニ云うべしと申すの月うふと
あらわから良傷よあらうか此物後ハ何所
すむにて天台乃是文もとをう作也後うか
ハ空也桐壇帝を坐した帝自比する等の事ハ
假誦へ此言既半通也教主五時乃教世相報
のすようふとくとくと六十四皆有亦空門の
うちありぬ色の名も絶ふは佛也よ歎する
きりたらすとあつ畢竟此言既ハ空也よ
モテ不喜え説尤可然其教ハ物理一部のけ
表情をうきる人を除くと幸つことあり此
又源氏のふくあらぬ事とあらまはま縁也
不可及又がく一もゆのてあらびに乃略之
作為の類也すと云者也

何
才廿七卷名白兵部卿一名董大將例の世人ハ白兵也董中將と云ひて又アヒテモ
花
以詞為卷名雲隱の後ハ董大將れ年數よりて年記と云ふ者一冊卷より董十四歳迄元服にて
侍從より仕へ十九歳を辛相中將と云ふ者一冊六十二年の事と云ひて
細
幻卷と此白宮の卷との間を年下ノリ一冊卷よりハ董の年齡よりて年記と云ふ者幻卷より
てハ五歳也今年十四歳より元服の事あり六歳より十三歳もろもロハ雲うきの中より少くうるセ
ゆ而やうこの卷まで年記雜亂セア別よりア花鳥十四歳より十九歳まで一冊と云ひ
トセ其の春まで年記と云ひてア

びうくれ花光浦氏侯院又隱居一候
二三年後終ニ昇霞一候多と云フ同草稿
うそんの谷よりもくらは日ひわざよやあわ
みほうよ花浦氏君の容儀才能心操きよ
つまそ立つまくさく人の内子殊の事より却ちある
べきうそくと云ひ也をうけられかへとハタ夥の所
すりとあまくうつる事と云フ
あらわの内門を細冷泉院也浦氏の赤と御
ハ隱寄るるうれハシレとハシレとハシレと
當代の三官 細 白宮也

アやのミク君 細十三官の内腹董也

キクもゆききと細拔群のへよ、あくと
孟 淳氏のあきらめうらやとよはりくわく
人也一段もれうらさハ云そハキ

תבנין

卷之三

。まくらかきひよ細ほほのぬまと人のぬゆゑと
。つゝの花ほほ君の桐壇の門ひろめ時ひゆうて
。まくらかきひよ細ほほのぬまと人のぬゆゑと

わあわうと半あん人のわあうふことひづ

三宮ハ瓦木、匂宮ハ紫上のお養子とてニ条院をゆ
けりゆくよきの住みと

めでてありて。かの魚を
すとわして。うれしき
うひよのが。するる
ゆゑ。まことに。う
かく。さきのうも。やうし
まつり。うは。う
じよ。あく。う
のう。あく。う
こかん。うへ。う
よあく。春まを。やく
うとう。うかく。う

アラタハ弄、白宮山愛子ちゃん也。

。六条院の南より 幸 紫上の西方也 女官のむすび
まこと

二の夕やも花東宮の西一腹極臺と西菖司より
時く六条院の寝殿とれやしこふりて夕霧の
右大臣の中君とひくひくと

一をも。うづきが、毛色
えぐわばに付とせんとちよは
と。うづきとくらわやまとせんと
ほくくのゆめ。かくは
おてんじゆくまとせんと
え秦院のあくらもくのひぐの
うづき。うづきのきのうづきと
ねうどちうづき。うづきの
うづき。うづきのうづき。
やくのうづきと。うづきの
うづきふ。うづき。うづきと
ふくら。うづき。

つこの坊ひ 花 今の東宮位よつをひく此二官
又坊よ立候まへ也とハ后よりそぞう

。かかひとみ 弃 夕霧也

○うのつさく 弃 大姫君ハ東宮へまつり中君ハ
二宮（あづかの次也）
○ほどのも巴歎 勿宮へ次第よまづせんと

此兵アラ 益々句宮也十五六歳アラ元服アリ其アラ
トド也タ霧の息サヨハナリモカクシキナ也我レム
トウカアラモトトク句宮の心也

器も花やの物、様字也。あともあく
器も様器と云へ本様の器也。正本のわよつて
いづ也。同へやうれ物と云ふのひづら、とくとく其
やうよどひづら、とくとく上の羽よつててスケレシ也。
弄うるそくは實よからぬとひやうよ用
うやうやのひづくべ
。もとももて、或段々霧モ一端ハ斟酌され
とくとくもれて、おじやむね也。

。六の君 花 夕霧の空をなむけに腹也宿不巻よ
匂宮のか方よどうりぬく也

。まことにいよいよ六条院の人も也

東の院とす 幸二条院の東院也 ほどの時ハ
空蝉未摘るゝのあつてあ也

三条の院 細朱雀院 うなづくはま
みどりくら

。今后ハ細明石中官也 秋好中官みよこくわんハ

テトそ今之字このじがなとしきも也

人のよそ 益夕霧の心也

。世のよしも 細門前零落鞍馬狀の心也

。あら 河出路日本紀大路万葉

。の花 花散里の住ひ不也 花散里
ハ東院とういんへうり住ひよりて 落葉宮らくようぐうとすとす
せひす也

。三条のと 花夕霧のゆれ雲井雁くもいのつばと落葉の
官くわんと十五日じゅうごひ住ひよりて 落葉宮らくようぐうとすとす
のうれ上云在うへうゑざのををハ宮くわんのあかひよひとす
ももトト十五夜じゅうごやてゆくつも

。の花 花散里の住ひ不也 花散里
のあふくすらうしてらきてせの
なうひものかくもあらひ
わくねのうらみのうらみを
ひふのあんきりにこのむ
あくよ。がくのゆりらかど
人ひともよきよくとも。うこが
のあはせと。うそのまらみの
柔じゅうのあとよくをもせ草
くん。うそものとよとよく半はん
自じつ。うそり。うかうひとみ
おけり。ニ無事むじしてはなし

。ひの花 明石中宮の山也白宮ハ二
条院より住むサ一宮ハ六条院の春日山也
ひの二宮もちりてんてへ住む也
弄 明石上さのくのめりて宿縁と

。ひの心ひ 益々霧はほ氏の時代換と不改
あや心あつ也

。ひの心ひ細紫上明上さのくと
きうち事とくらかくとあす

。終よひをと 益 これハタきの野分のくと
ききてとうり心と紫上ハツキミシテおも
玉あすとタ霧のくと

。河左右史記

。火とぞく 河佛出夜滅度如薪盡火滅

經

。つづきすうやへとをもくまう。だ
よひまくととくじて。我ん
うととアラモジテ。まくとくも
きくと。まくひくとくとくも
おーくわすり。まくひ
すくと。あとのたのくを
うひまくとく。まく
つまくと。せやでゆきちろ
やうふうに。とものもあまが
まくとせゆうあうりく。まく
まのうのく。まく。まく
まくあどがくとく。まく

ハ
食事

卷之三

○春の花乃河ちれハモリモ桜ハウセキ
うきせよ何リターノミ花のうきくらき
てモモ桜花有て世事とそのうきれハ
弄までといふよちうてもあら物うへるよと
移よどひきもさり 可然うきうろと云羽あれ
此哥もまうろとわれ也

。えさひのアスや 花秋奴中宮のタ也 薑の品也
うえど一也

十四年二月。細花鳥十六歳中將より仕合
是ハ竹川とて年記の相違あり故也。十四歳の
秋中將より仕合可然也。
ゆくとくそいの花冷泉院の所給年官年爵の
事也。叙位の時より院乃所給と四位の加階もあ
りふる也。
ゆくとくそいの身よりして次第
の昇進とも心よりうなづかず。院の所給
こそ加階して早速より昇進させらる。
ゆくとくそいの花冷泉院の中止附と薦
の曹司より仕合
せのゆくとくそい巴抄姫君よりへと
一本ゆくとくそい

○人不見也孟之八冷泉院宮八秋好中宮也

も。まづやうにせし。かくも。おどり了。
くのうのあよのまづ。ゆきの
けよひ。うちと。あてやふ
めをすまへ。まくらを
あつ。かんのくらと。まくらを
て。ほくわくと。うそべり。
。まくらと。あくまく。まくらを

ニ致仕の御く 花 冷泉院の世弘徽殿とゆき
ハ致仕太政大臣の内女也 うのみ腹よ院の内女と云
わく ちとせ一宮ヒトヒ此宮ヒトヒツセウア
サヨウヒトセウト董中將君ヒトウシヒトミ
或抄致仕大臣逝去の事ニテモアリ

○ささの宮の花 秋好中官のけ物切の年月
みちうりぬよくゆきハ董のれあひハナモ

細冷泉院の女官と/or/と又
秋林中宮董と/or/と又とく
ゆくもと人びとすと花鳥説い
。母宮ハ細サ三宮也

○うてハおやのやうよ 益薰とせ三官のおを
○ひと長そと 或は 薫の心也

かやぐくのか・テ・風ふるえりよ
さとひよじとが・シ・や・ハ・風
ア・タ・キ・テ・キ・ル・シ・ヤ・ハ・風
カ・ト・ア・ヒ・バ・ク・シ・テ・キ・
ム・カ・リ・キ・セ・バ・ラ・シ・ム・の・あ・リ・
カ・リ・ト・シ・テ・ハ・ガ・ヤ・の・あ・リ・
カ・リ・キ・セ・ハ・ガ・ヤ・の・あ・リ・
ト・シ・テ・ハ・ガ・ヤ・の・あ・リ・
ト・シ・テ・ハ・ガ・ヤ・の・あ・リ・
ト・シ・テ・ハ・ガ・ヤ・の・あ・リ・

○身と心をも河董ともかくよきのハセキ
でぬ零のアラモトヨリ心う。世故山中もひふさ
コトヒミタシル母宮へとさくらまれまくせれみ
ララとアラモトヨリ食也
のがのうておひー 河董中將爲柏木權大納言子事

圓及乞 側因

○何のうまうそ 奥妙アラモトヨリ宿縁モ親ギ
アラム身ヌハ生ハカラタシ

○せんきう太子 奉當流本加世或くい太子ア可用
之もミ瞿夷善巧同名乞耶修多羅之同位瞿夷
河疏記ア二日 樂記昔時瞿夷是今日耶輸多羅
也耶修多羅比丘尼之子羅睺羅尊者佛出家之後
經於六年誕生大臣疑之耶修多羅於兒放火投之全
不燒是則哲言言也 花法華會上アラモトニ乗正
覺悟ヒヒテ未來の記前と授乃ア時我爲太
子麻羅曇爲長子我今成佛道授法爲法子と偈と說
アラモト佛の法子とハ定シラムと我身ヌヒキ
サトヒヒツヤ
○ゆりうみ奇花 董の心ヌ只イアヤハ六条院品
モヒテハキモヨシヒテヒテ始トキナセ柏木の子ヒヒ
ヒヒテ六条院の子ヒヒテ列ヒセス用ヒレ仰ク是又果ヒ
ヒヒテ又接ヒ無始無終の道理心地の法門ヒヒテ
ハ我ガヒヒヒン悟ヒヒテ云ヒ相應セリ詞也則ヒ下
ソヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒ
荅者ヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒ
○宮ヒヒヒ細サ三官也

○アラモトヨリ万水柏木の密通ヌエニ
アラモトヨリ董の推量一候

人ともさよ或抄柏木の事とあうと人ありき
生じてこそ我よりひきをもとまうとらむ也

よ。かづらとがる
う。あらまくてもあまふり
あ。やひうきじひと
乃。やまんふうり。よへなま
を。もくすう人のふきあわせ
う。ゆくとわせやうかわせ
ど。もくもくゆくわせ

。そらものあも 河蓮葉のうす
えてもよハあと手とゆきし

可世人身猶有五章

細さもとよもとようとうをう餘情類す

卷之三

のうのまきあい 弄柏木のう

。世とくべても 巴抄生とくべても也一本せとくべ
えとくべ
。きんやハ孟 生家の心すくへて也

○うちと
弄 今上也 朱雀院の女三宮のと
トとせりて 今上東宮の和時也
細 内ニハ女三宮連枝とて さよとゆく也

○此の花や花山后宮ハ明石中宮也。もうち
も中條中將と同一く六條院を生出候也。
或按二官匂宮同殿。そちうやう生出候
源氏のうふくらむとくよあへひはく

○此の花や花山后宮ハ明石中宮也。もうち
も中條中將と同一く六條院を生出候也。

○此の花や花山后宮ハ明石中宮也。もうち
も中條中將と同一く六條院を生出候也。

○右のゆゑも孟夕霧の我ゆすらうと董
といふとくね也

○じうひう君孟源氏と桐垂帝の崇敬の
ゆゑ也

○君人細弘徽殿の大后二条大臣も

○まことと表歎源氏の嬌けうきし也

○あらわす花桐垂帝の朱雀院の東宮と
ひきこて六條院と坊主とちうしまとへる
むきのあくしよと云也。
細左遷の子也。京有てハ思うて仇と報うや
うすす恨とのうほんとく自身と全
ほつ殊勝のうと花鳥説如何
後世のゆづら細嵯峨院は隠居うふくら
くもうとくねととハアキのまと
とくねくねとくね

○サ君ハ細董也 美譽芳聲もとやくす
あり。す。うのまことかくす。
よせのおはしゆす。おひ

。うよわ花 佛菩薩のくまく抱胎
えく人界に生ふる事とソ也

。人ノ似フ 董後群のへりへり也

けさかくくとてのと
あらう。うのまことかくす。
よせのおはしゆす。おひ
あらう。うのまことかくす。
あり。おはく。うのまことかくす。
せのんとねはく。うのまことかくす。
よだく。うのまことかくす。
せつ。うのまことかくす。
づく。うのまことかくす。
せのんとねはく。うのまことかくす。
よだく。うのまことかくす。
せつ。うのまことかくす。
づく。うのまことかくす。
のく。うのまことかくす。

。此世の匂ひ已歎 天人の心をとめ香也 三千二
相ハ三十二の毛穴より香出う也 太祖宋朝勅香孩
子生時一室董 と聖德太子誕生の時と號せ

。百外 河百英香

。されどさばく 改歎ほ氏の心をくじりやとの
人のとうづくらひるゝもるゝもるゝもるゝ
あらのまことかくす。

。うながす おはく。うのまことかくす。
さうとそうさうさう おはく。
。うのまことかくす おはく。うのまことかくす。
のうのまことかくす おはく。うのまことかくす。
のうのまことかくす おはく。うのまことかくす。

そももうとくへあつまへせ

とうとつを細匂ひゆきもうめくと

うひつすす董の香とよとよとよと

うひつすす董の香とよとよとよと

とく袖を花古今色とりも香と良よ

おりやゆとすと宿の梅と

春のそとるを河さす拂そと我がはなれ

こわすとくへのこみまゝ花匂の君

大船

やくわ花われハわらすとよ和され

秋のよしとく河古今やうとふうとく

へき秋のよしとく河古今とくとくとく

の匂いハ孟もくの匂いとくれと

あうとく也拂董のやうとくとくとく

人のよしり 河梅花ともうろとくわい
う人のよしり香とくとくとくとくとくとく

のよしとくとくとくとくとくとくとくとく

のよしとくとくとくとくとくとくとくとく

のよしとくとくとくとくとくとくとくとく

のよしとくとくとくとくとくとくとくとく

のよしとくとくとくとくとくとくとくとく

のよしとくとくとくとくとくとくとくとく

のよしとくとくとくとくとくとくとくとく

のよしとくとくとくとくとくとくとくとく

うのとくに白ひじきのあらはがまつせ
ほくみとくへさんされば下は河よりもく
うと叶ハ字すてくとく
老とよとく菊河貲の老とよとく云菊ハ百
年とゆう花うそ有ちう花高きうやうてき
そんきの花老せぬ秋のそーろく
アレリ花使衣いさの霜ふねえとれ
ノ秋ノ物を匂ひうき

のとくに白ひじきのあらはがまつせ
すとくもかわくのうのうの
まておがとくとく

の源中將 幸董也句官(きくは)也

やうしらく細やんじる也
アヤハ高くよ万水句官ハ好色ゆきゆく真
實ゆ心よめのくとも先一トモハ心と
トセキニトシムトスハ董ハ實ヘ
ツヘミトク也

の源中將 河若共

うのとくに白ひじきのあらはがまつせ
ほくみとくへさんされば下は河よりもく
うと叶ハ字すてくとく
老とよとく菊河貲の老とよとく云菊ハ百
年とゆう花うそ有ちう花高きうやうてき
そんきの花老せぬ秋のそーろく
アレリ花使衣いさの霜ふねえとれ
ノ秋ノ物を匂ひうき

うのとくに白ひじきのあらはがまつせ
すとくもかわくのうのうの
まておがとくとく

○冷泉院の弄致仕のせひにさうのせひの腹也
或挾以下匂宮の心也

○まことに女らく万水姫宮へまつてお房も
内あり爰と匂宮よりすまつておひく
おひゆまと

○まことに女らく万水姫宮へまつてお房も
内あり爰と匂宮よりすまつておひく
おひゆまと

○中將、世中と孟董ハ道心とやうとよばる

○ソリナリコ、或挾冷泉院サ一宮をもすむ
しよくの賛ようてハ自由りよ

○ヨリあらて細草子地也

或挾董の心ぞじろへりハくばり

○ヨリあらて孟賢人トモヤシ
人のゆき孟董の本性人のゆきよきよ

○ナニヨリテ、弄董の十四トモテ元氣の巻
ユダクテテ次ノ巻又ハス立厚て先年ノタカ

○ヨリあらて孟賢人トモヤシ
人のゆき孟董の本性人のゆきよきよ
ナニヨリテ、弄董の十四トモテ元氣の巻
ユダクテテ次ノ巻又ハス立厚て先年ノタカ

○ヨリあらて孟賢人トモヤシ
人のゆき孟董の本性人のゆきよきよ
ナニヨリテ、弄董の十四トモテ元氣の巻
ユダクテテ次ノ巻又ハス立厚て先年ノタカ

河 九 俗 日 本 紀

○身をちりぢり或教出家の心ヲ不絶也

。やうやく孟董のまへへんがハラヒ
立也

。とくに心を細め柏木の心をあつまつて
心襟ととめて實法を以て之を

○三宮の 益句官也

ひも院のうち 弃童ハ冷泉院のみすゞ
て

おまよひと或缺 薫の心也女官のふと只ひ

。大さきこそ 巴歎 薫よ冷泉院大さきのこゝろへそ
ほくひ姫宮のあそへ心ゆくねふるも

卷之二

卷之三

河 杖 組 日本紀

○ものうち 万物馴寄也

○さうかく人よ細天竺の風情せ人もさういやと
うきゆくよまひなも多うえこよも心がまわね
まう

うとまの或様大き也實心よりひそむる

もあらへば。されば。かまひ
うりのうるはげ。がくね
くもとあらへば。か
うて。かのかれんともす
う。う。う。人をあでらまえと
かのじあわきぬ。かしらへ
くさびのくじ。とら
む。二。も。かくと
かく。かく。あわがふく
う。う。う。のうじ。う。う。
あまふうと。くせにあふと

うきをきみ 益情ありとて又着てらるゝも
うきやうよ董のあひへひ也

河引卒
或歎 董よ心とよりあり人我心よりうきよて也
三条宮より細サ三宮の内方也よりうきよ董の内
ありを承とぞアラクハシル也

○もあらまきと/or然るべくと
のへくもあり也 乎 近便うきへく也

細うひうきるといひひうき
巴按 我はよしとくわくわく也
宮のあくまさん弄女三宮のいと董の心中
わきと 河不離也

花右のやく我じとちと白宮も
董もひこくへばひだり
ゆきとすと孟白宮董也此あくまさん弄女
の心也

わらひのゆあつまはれへんち
人まかうめくわくわく也
そアヤナズぐわく。みゆのわ引え
せのうめりへあがくよゆうとまきと
ゆんぜきとやんをせんと
とらひのゆあつまはれへんち
あまひのゆあつまはれへんち
とひくくへとくとくとくとくと
うくえとくとくとくとくと
うくえとくとくとくとくと
うくえとくとくとくとくと
とひくくへとくとくとくと
とくとくとくとくとくと

○石川とす 井本臺とうじ

○おとくとす 或内侍のとくとくとく

○一条宮の或按落葉宮ハヨトキタマカサ
六君と養子ヲ

○此くは孟白宮の董もアヤナズ
ムセキアテウアツマ

ハトツアラハ花 さかとあくやハトツア
ミトキテ此君トシヨハコトトモ
アセナキリトハセ也
弄普通のリツアトハドヘアリハモト
物のみトモトモトモトハ人の心とトモト
或妙嚴重也キビトカタクナムアシテモ
タミニハモトモトモトモトム也俗ヨアハ
ヨリヒトシル

のアラヒアリ河 賭弓 清和天皇貞觀二
年正月十八日始之 北山掛賭弓還饗大將次將
墳下公卿着座之次才委アリ依般繁多略之
花正月賭弓とくら方の大將里オリテ
還饗食ヒシタと行也此時夕霧右大臣の左大
將も六條院モ行之負方の人ハ必早出モ
例也董牢相中將ハ右の負方也
弄薰十九歳モ宰相中將又任モ翌年廿歳の
春のタ也花鳥十九歳ミ如何

○トコヒアカハ 細 明石中宮の臣腹也

孟 明石中官の腹男官四人一宮東宮二宮式部卿

三宮白兵部卿 五宮中勢官 更衣腹 四宮常陸官

。四のアラヒアリ官 花 皆當今の内子也五宮荀

例の花アラヒアリ細此物語花右ヨリス事
大略花勝也繪合韻ヤモト皆花勝也モ例の
トモトモトモトモトモトモトモトモトモト
或妙賭弓勝負事ヒシタ還饗ハ勝負果て
勝方行ヒヒシタ外よ上約よ六條院モ還ナリ
アラヒアリ不審也外共此物語ハ後よりア
トモトモトモトモトモトモトモトモトモト
トモトモトモトモトモトモトモトモトモト

。宰相中將ハチモトモトモトモトモトモトモト
トモハ還饗食ヒシタ不審也勝方の大將饗應

。アラヒアリ不審之の文法可見也

もうどううやうとよ

。石とよもやかくそくへ或掛夕霧の董よみがほ

卷之三

の子の弄 皆夕霧の息也

檜木坂を左折
まちあわせへと向こむ

アラのヤ 巴按道遠也

物のを
或抄道を車て吹也

。もよろと 孟 六条院の躰佛國のやうやうと
初音巻は註も

○アラタニのひよ 花扇の座中女将ハ勿くは芳よ
つき親王ハ端より是とハ垣下の座より中女将
と寝食應じう請伴の心也

○
タチ子 花うさかうハ袖をひつゝも、還饗食の
時采子將監以下舞也 河北山記還饗食日三獻訖
有絃哥之真給祿有差或余東遊將監以下舞
細風俗のハシ母を采子とうさかう也

例の中将の・孟
董也

の處アハめやうき 河春のトロヤヘハめやうき 梅花
色えそアソシねや、ハクシキ
つうよとそきよ 河 ゆう雪よ色ハまくしお梅花
香よと似すりのうきよとれ

○アラルはハよ花董中將實法ゆううろと云也
○右のトモトヒ細々努の羽董ハ負方されくろ
亭丁ソモハ別而どうゆうらが人を云うと

○おうとうとくや 益客へきのやうよハ
○おひしきとく
○神のまことく 花神のまことハ采子の二段
○右のことをハ董のまことへうち也此結句ハ若菜の
丁巻のあく筆法也

河ハし女谷、もあハシラヤシ女そくらやハ
シ女そくらやハし女 二段神のまことみのれ社より神の
やまとくさよ也 一方の大将そくわの日風俗の神
のまことそくわの奇とうす定め也

うひのとうら
うよ例のけやひかうりの
ど
きよすのゆく
もとあやめ
い
せ房やどもやまわやまくろ
あさやどあれどもや
きふみちやのあくと
めぞりて
とんびく.
うまうて. んがく
うおさめんちをく.
まともとくとく

